

聖人信仰とカトリック



街角の壁龕の聖母マリア像。周囲にはエクスヴォートが捧げられている（2007年、ローマ 筆者撮影）。



火事から命拾いをしたのは聖母マリアのおかげだとして、その様子を描いたエクスヴォート（国立民族学博物館所蔵）

イタリアの宗教といえば、ローマにバチカン市国を抱えているせいもあって、現在でもほとんどの人がカトリック教徒であると自認している。日常会話でも「あの“人”」の代わりに「あの“クリスティアーノ”（キリスト教徒）“”という言い回しがよく使われる。しかし一言でキリスト教、カトリックと言っても、実際の生活におけるあり様は複雑である。

たとえばイタリアに限らずカトリック圏では、聖人に対する信仰が盛んである。なかには聖アントニオが動物の守護聖人とされるように、役割が特定されている場合もある。聖人は教会によって公式に認定される。「列聖」と呼ばれるこの聖人認定は今も続けられており、昨年はマザー・テレサが列聖され、世界的なニュースになった。

聖人信仰の様子は、エクスヴォートと呼ばれる奉納物にもみてとれる。これは聖人や神に願った後で捧げられるものだが、単なる感謝の印ではなく、その聖人や神の力を証明するものでもある。このため、恩寵や奇蹟によって治った手足など、身体の一部をかたどったものや、奇蹟の場面が描かれた絵などが奉納されることも多い。治

療中に使用し快癒したために不要になった杖や石膏型などもある。そして、これらエクスヴォートが数多くある教会や聖像などは、いわば「霊験あらたか」とされ、さらに信者を集めていく。こうしたことから、カトリックは唯一神を信ずる一神教ではなく多神教に近いといわれることもある。もっとも、教会によれば、聖人に対する「崇敬」は神に対する「信仰」とは異なり、聖人は人々の願いを神にとりつぐにすぎない。しかし人々の実感では、どうなのだろうか。

実際、イタリアでは聖母マリアを含む聖人は非常に身近な存在である。街角のあちこちにみられる壁龕には聖人たちの像や絵が置かれ、近所の人々が花を飾るなどの世話をしており、エクスヴォートが捧げられていることも多い。また、生前から多くの熱狂的な信者を集めていた聖ピオ神父（一八八七年伊生まれ、一九六八年死去、二〇〇二年列聖）のように、宗教・信仰というよりも社会現象といったほうがよい聖人も少なくない。信者には若者たちも多い。その一方で、ミサへの出席が減るなど、人々の教会離れは深刻である。

聖人信仰の根強さは、イタリア社会によくみられるクリエンティズモ（恩顧主義）との関連を指摘する研究者もいる。恩顧主義とは、権力者に近づくため友人などの仲介者を利用してよとする行動様式だが、その構図は、信者が神の力を得るため聖人に頼るといふ信者―聖人―神の関係に似ているという。いずれにせよ、彼らの宗教実践が狭義のカトリックには収まらないことは明らかだろう。歴史的にも、カトリックがイタリアに入り込む前から様々な宗教や信仰があり、それらが形を変えながら続いているとみることもできる。

宗教・信仰というと、私たちはつい大宗教の次元で考えがちだが、その実態はもっと複雑で豊かなことも忘れてはならない。（宇田川妙子）